

溝口家旧蔵の茶道具拾遺

宮 武 慶 之

『文化情報学』第九卷第二号では、溝口家の茶道具の蔵帳である『新発田御道具帳』を紹介し、現存もしくは文献記述から蔵帳に所載される作品を紹介した。その後も調査を継続したところ、蔵帳に所載される作品や、蔵帳には所載されないものの溝口家伝来とする作品が確認された。それらは茶の湯で使用される茶碗や香合、花入などであった。本稿では引き続き蔵帳と合致する作品を紹介するとともに、蔵帳に合致されない作品も紹介する。

なお、『新発田御道具帳』の翻刻については第九卷第二号を参照されたい。

一 はじめに

筆者は平成二十五年五月、新発田市立図書館における溝口家文書の調査を実施した。これらの文書は、新発田藩家老の溝口伊織家の旧蔵した文書である。そのうち藩主溝口家の所蔵した掛物、茶道具などの所蔵品リストである蔵帳を四件確認した。

四件の蔵帳中、主要な茶道具などは『新発田御道具帳』に所載されている。同書には茶碗、茶入、茶杓、棗、茶巾盥、水指、建水、釜、炭斗、水次、灰器、茶箱が記載される。これらの道具は新発田藩藩祖溝口秀勝（一五四八―一六一〇）以降の歴代藩主によるコレクションである。

『新発田御道具帳』をはじめとする四件の蔵帳は、『溝口伊織家古文書（目録第一集）』で紹介されるも、これまで調査がなされることはなかった。⁽¹⁾

筆者は、溝口家の所蔵した道具から、茶の湯文化の活動を明らかにするため、四件の蔵帳の記載と合致する作品を調査してきた。『文化情報学』第九卷第二号では、蔵帳の翻刻を行い、合致する作品を中心に紹介した。⁽²⁾ そのうち、窯分分類において瀬戸の胴高手の本歌とされる『溝口胴高』（個人蔵）の所在を確認できたことや、小堀遠州作共筒茶杓銘《式部卿様まいる》（北村美術館蔵）が溝口家の伝来品であることを明らかにした。

その後も調査を継続したところ、第九卷第二号で紹介した《織部杓茶

《碗》の熟覧調査を行うことができたため、その紹介を行うとともに、新たに溝口家旧蔵品として判明した作品を紹介する。また、調査の過程、蔵帳には所載されていないものの、溝口家旧蔵品とする作品があったため本稿で併せて紹介する。

同家の旧蔵品の中には藩主自身による書付などがあり、藩主が実際の茶会等で使用した記録も残されている。同家の旧蔵品と共にその書付などを明らかにすることができれば、溝口家の茶の湯文化を研究する資料になりうると考えた。

本稿では、『新発田御道具帳』と合致する作品、蔵帳には所載されないものの溝口家旧蔵品である茶道具を紹介することとする。

二 蔵帳に所載される道具

(1) 現存を確認した作品

① 織部沓茶碗 (個人蔵、図1)

『文化情報学』第九巻第二号では『大正名器鑑』に所載される溝口家旧蔵の茶碗であることを紹介した。その後の調査から、この茶碗の現存を確認した。

この茶碗は『大正名器鑑』に所載される。同書によれば筆者の高橋篤庵は、明治三十四年(一九〇一)に池田慶次郎を介して、この茶碗を溝



図1 織部沓茶碗 (個人蔵、撮影筆者)



図2 茶碗の背面



図3 茶碗の高台部分

口家より購入している。篤庵は明治三十五年頃に溝口家と直接取引によって道具を五十数点入手しており、この茶碗もその一つであると考えられる。その後、篤庵は昭和五年(一九三〇)十月二十七日に開催された高橋家の売立を行っている。同家の売立目録が『一木庵高橋家所蔵品入札』である。同書にこの茶碗が所載されており、売却していることがわかる。現在は、個人が所蔵する。

この茶碗は溝口家の蔵帳中、「御茶碗之部」において

御最買入 織部沓茶碗 箱書御宛名

として所載される。古田織部(一二五三―一六一五)から溝口秀勝に贈られた茶碗である。⁽³⁾

この茶碗を実際に拝見したところ口造りは厚く一段捻り返しており、大振りな茶碗である。釉薬は素地に薄いものを掛け、更に濃い釉薬を掛け変化をみることが出来る。茶碗の正面はススキを想起させる絵付けがなされ、背面(図2)は無地である。見込(図3)は深い。沓形の茶碗で、胴

部には篋目が数条みられる。高台あたりまで釉薬は掛かるが高台部分に胎土をみることで、きめ細かな土で、桃山期の織部にみられるものである。高台には織部の在判が漆で書かれている。

収納する箱甲（図4）には

溝口伯州様

古田織部

とあり、茶碗の仕服は白地花模様更紗で、『大正名器鑑』所載当時と同様である。茶碗を収納する箱には溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印はない。

秀勝は慶長八年（一六〇三年）十月五日昼に行われた織部の茶会に客として招かれていた⁽⁴⁾。両者には茶の湯を通じた交流があり、本碗もその交流によつて織部から秀勝に贈られたものであると考えられる。

この茶碗は溝口家の初代藩主による所持品で、同家の茶道具コレクションの中では初期の作品である点で重要と位置付けられる。

②伊羅保茶碗銘《團扇》（個人蔵、図5）

現在、個人が所蔵する伊羅保茶碗銘《團扇》である。拝見したところ、釉薬の掛かった部分は枇杷色である。口造りは二段となっている。高台の廻りにまで釉薬が掛かっており、胎土をみるができる。口廻りが団扇形になっているところから命銘されたのであろう。造りは総体に薄作である。

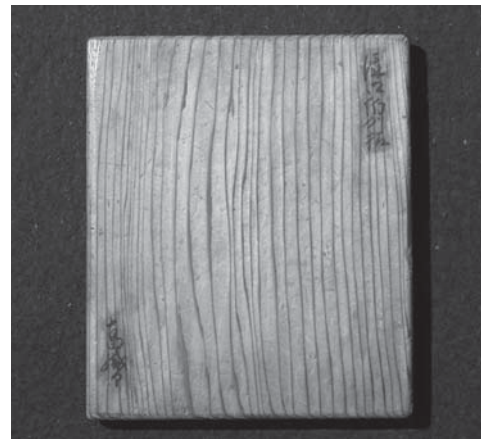


図4 収納する箱甲部

茶碗を収納する箱甲部には遠州茶道宗家八世、小堀宗中（一七八六一八六七）によつて「団扇 黄 茶碗」と書かれている。

箱の覆紙には溝口家の旧蔵品であることを示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られている。筆者がこれまでみた溝口家旧蔵品において蔵印は箱甲部もしくは側面の木地に直接貼られていたが、この茶碗では覆紙に蔵印が貼られている。

覆紙の裏（図6）には溝口家の家臣による筆跡であろうか、以下のような記述がある。

文久二戌年三月五日小堀大膳様

御招御茶會取遊候節御伝来之

御品にて高麗端反と申伝へし御

茶碗御用ニ相成候處小堀様伊良保

上手之御鑑定候新に箱出来箱書

御用人様へ御頼其節分団扇伊良保

と改銘

記述から、この茶碗は文久二年

（一八一六）三月五日に行われた茶会において用いられたことがわかる。この茶碗は溝口家においては高麗端反の茶碗として伝わっていた。茶会



図5 伊羅保茶碗銘《團扇》
（個人蔵、撮影筆者）



図6 茶碗を収納する箱の覆紙裏（個人蔵、撮影筆者）

文久二戌年三月五日小堀大膳様
御招御茶會取遊候節御伝来之
御品にて高麗端反と申伝へし御
茶碗御用ニ相成候處小堀様伊良保
上手之御鑑定候新に箱出来箱書
御用人様へ御頼其節分団扇伊良保
と改銘

当日、この茶碗を拝見した宗中は、伊羅保の上手であると鑑定し、その後箱書をしたことがわかる。なお、この茶碗は『新発田道具帳』『御茶碗之部』をみると、

一 いらは團扇形茶碗

とあり、蔵帳の記述と合致する。

この茶碗が用いられた文久二年（一八一六）三月五日の茶会とはどのような茶会であつたのであろうか。宗中と交流があつたのは十代藩主溝口直諒（一七九九―一八五八）である。宗中は直諒の茶会にしばしば招かれていた。

文久二年（一八一六）すでに直諒は没しており、茶会の亭主となつた人物は十一代藩主直溥（一八一九―一八七四）である。

ところで現在、個人が所蔵する小堀宗中筆溝口直諒追憶和歌三首《雪月花》がある。この三首は、溝口直諒没後、宗中によって追憶の意を込めて書かれた和歌三首である。宗中は直諒に招かれた茶会のうち、雪月花に因んで各会を取り上げ、一首ずつ詠じたものである。溝口家の掛物の蔵帳である『御掛物帳』には

一 三幅對雪月花之哥 宗中筆

とあることから、溝口家の旧蔵品である。

三幅対のうち《花》（図7）に注目すると、以下のような記述がある。

文久二年弥生新発田

公に召されて花の御茶

賜はりしにむかし

翠濤君の祝の御会

なそおかひ合かはらぬ

いつきしミのうれしさを

宗中

幾ちとせかはらぬ花をあふきても

きミのめくミの高きを今みれ

記述から文久二年弥生の茶会とは、先述の三月五日の茶会をさすものと考えられる。すなわちこの茶会は花を趣向にした会であつた。文中の「新発田公に召されて」とあるように、当時、

直諒は没していたので、亭主は次代の当主である直溥であつた。弥生の茶会に招かれた宗中は、かつて直溥の父である直諒（翠濤）に招かれた祝いの茶会を述懐し、代が替わっても変わらぬ交流を謝して、「幾ちとせかはらぬ花をあふきてもきミのめくミの高きを今みれ」という一首を詠んだことがわかる。

小堀宗慶によれば宗中は子宗本（一八一三―一八六四）や蓬露（一八一六―一八七六）とともに溝口家に伺候していたことは指摘されていた。⁽⁵⁾ 本幅の存在によって、小堀親子が次代の藩主である直溥とも交流していたことが判明する。このときの茶会で用いられた茶碗こそが伊羅保茶碗銘《団扇》である。本碗は小堀宗中と溝口家当主二代にわたる交流を示す貴重な資料である。

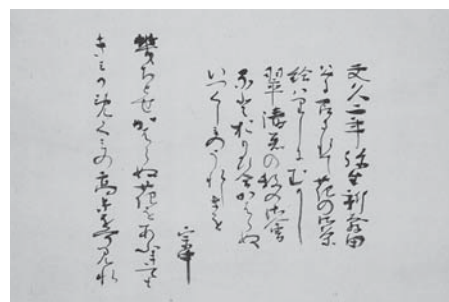


図7 小堀宗中筆溝口翠濤追憶和歌三首《雪月花》のうち《花》（個人蔵、撮影筆者）

宗中

③清巖宗渭作茶碗（野村美術館蔵、図8）

現在、野村美術館では清巖宗渭（二五八八―一六六二）の自造による赤楽茶碗を所蔵する。この茶碗は、『野村美術館名品図録』に紹介される。⁽⁶⁾図録中、茶碗を収納する箱甲部の画像が紹介されており、溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られている。この茶碗は『新発田御道具帳』『御茶碗之部』にある

秘蔵 清巖手造茶碗

と合致すると考えられる。

そこで野村美術館学芸員桐山秀穂氏の立ち会いのもと拝見することができた。茶碗の側面は篋目が入り、内側は削り跡がみられる。見込には茶溜まりがある。赤楽であるが、薄い萌黄色の釉薬が掛けられる。側面には清巖によって「東山水上行（花押）」と書かれる。花押は清巖自作の茶杓などにみられる鍵判と称するものである。高台は竹節高台となっている。茶碗の付属品として菱紋の金襴による仕服があるが、これは溝口家の家紋である搔摺菱に因んだと考えられる。茶碗を収納する箱（図9）墨書の筆者は甲と裏共に古筆了伴（古筆宗家十代目。一七九〇―一八五三）によるものである。甲部には

自笑作 茶碗

とあり、「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。また、裏には

清巖和尚自作



図8 清巖宗渭作茶碗(野村美術館蔵、撮影筆者)



図9 収納する箱甲（右）と裏（左）

東山水上行判

有之

正筆相違無之候也

古筆了伴印

とある。

ところで、『文化情報学』第九卷では高橋箒庵の売立目録である『高橋家御蔵品入札』から溝口家伝来品を紹介した。そのうち「清巖自造茶

<p>自笑作</p> <p>碧雲山房 蓄蔵物品</p> <p>茶碗</p>	<p>清巖和尚自作</p> <p>東山水上行判</p> <p>有之</p> <p>正筆相違無之候也</p> <p>古筆了伴印</p>
---	--

碗 溝口家旧蔵」の図版があった。野村美術館蔵品と形状を比較してみると同一の茶碗であることがわかる(図10)。

箒庵は明治三十五年頃に溝口家から直接取引により道具を購入しており、この茶碗もその一つであると考えられる。⁽⁷⁾その後、この茶碗は野村得庵(一八七八―一九四五)が所蔵し、現在は野村美術館が所蔵する。



図10 『高橋家御蔵品入札』(上)と
野村美術館蔵品

④瀬戸茶入銘《大概》(個人蔵、図11)

この茶入は昭和六十年(一九八五)に、三越本店で開催された茶美の会に出品された。現在のところ、この茶入の所在は確認できていないが、図録『茶美の会』(茶美の会、一九八五)から茶入本体および付属品が判明する。そこで図版から茶入について検討し、溝口家との関係についてみてみたい。

茶入における大概とは窯分け分類において大概手すなわち生海鼠手の本歌とされる。生海鼠手とは『原色茶道大辞典』によれば、「瀬戸茶入の

窯分け名の一つ。金華山窯に属し海鼠状釉薬がかかっているののでその名がある」とされる。⁽⁸⁾

小堀家茶道であった桜山一有による遠州茶道に関する聞書きをまとめた『桜山一有筆記』

によると、生海鼠手の茶入について、以下のような記述がある。⁽⁹⁾

金花山生海鼠手ノ茶入ハウま過て数寄二不入之由、遠江守殿被申之由、遠州ノ時代ハ如此、今ハ古ひもよく成候故用申事也

記述によれば、遠州は生海鼠手の茶入は釉薬がよく出来過ぎており、茶の湯で使用するにはいかながなものとされ、遠州在世当時はあまり使用されていなかったようである。その後、一有の時代になってから使用されるようになったことが述べられている。

現在のところ、生海鼠手の本歌は、『大正名器鑑』において瀬戸茶入銘《三輪山》(住友家旧蔵)とされる。しかしながら生海鼠手すなわち大概手の本歌として当然、大概を銘とする茶入の存在が考えられるが、これまでのところ確認できていない。今回、図録の調査によって瀬戸茶入銘《大概》の所載を確認した。

茶入の高さは八・五センチ、口径三・三センチ、胴経六・四センチ。瀬戸釉の茶入である。従来の生海鼠手にみられるずんぐりとした印象はなく、肩がきりりとしており、力強い印象を与える。この茶入を収納する挽家には小堀遠州(一五七九―一六四七)による字形がある。また収納

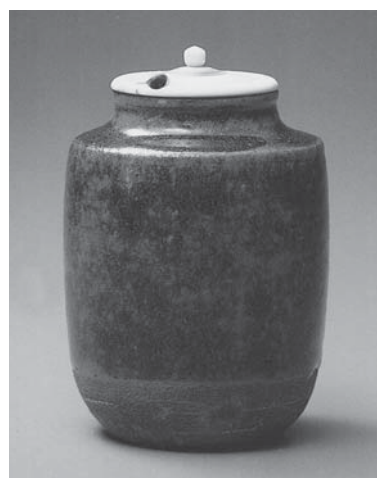


図11 瀬戸茶入銘《大概》(個人蔵)
(『茶美の会』より転載)

する箱甲にも定家様による墨書がみられる(図12)。茶入の仕服は大牡丹金襴、永観堂金襴の二つが付属しており、挽家の仕服は有栖川錦である。

大概について、溝口家の蔵帳である『新発田御道具帳』には以下のような記述がある。

寶上乾坤入

一 大概茶入

但御名物蛸高同品名物御座候御分置

被為在り箱之御茶入之處御蓋召て数子入

申候尤宗甫真跡にて生子手の本歌御座候

右宗中鑑定同人真筆之被申俄作之置

記述によると、この茶入は胴高、すなわち『溝口胴高』(個人蔵)と同様の名物茶入であり、蓋が複数付属していたことがわかる。箱の墨書は小堀遠州による筆跡であり、生子手すなわち生海鼠手の本歌であるとされている。小堀宗中による鑑定では、遠州による箱書を真蹟としている。また、乾坤入とは、同家の伝来品をさし、この茶入が重宝とされた

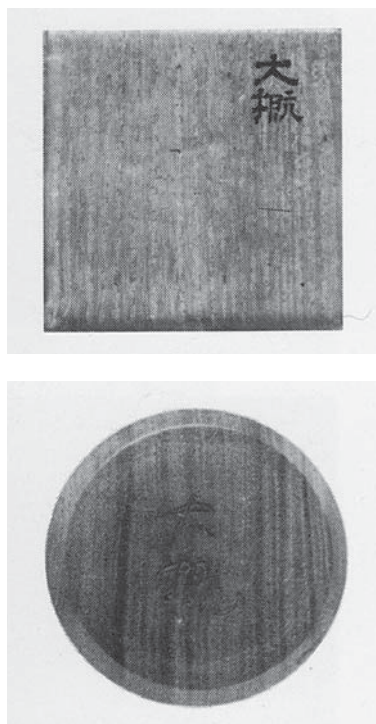


図12 茶入を収納する挽家および箱の甲部

ことがわかる。

そもそも、この茶入は小堀遠州が所持したのち、本茶入をはじめ五種の器物が、徳川將軍家の御庭方である縣宗知(一六五六一七二二)を介して新発田藩四代藩主、溝口重雄(一六三三—一七〇八)に譲渡される。溝口家に伝わった小堀家伝来の道具は、『大概』、『閑極法雲・東澗道洵筆墨蹟』、『溝口胴高』、『蛸』、『青磁四方香炉』である。⁽¹⁰⁾

筆者のこれまでの研究では譲渡された五種の器物のうち瀬戸茶入銘『溝口胴高』(個人蔵)、『閑極法雲・東澗道洵筆墨蹟』(個人蔵)、瀬戸茶入銘『蛸』(畠山記念館蔵)を紹介してきた。

今回、瀬戸茶入銘『大概』を提示できたことで溝口家に譲渡された三つの茶入すべてを紹介することができた。

(2) 売立目録から確認できる作品

管見の売立目録には多数の溝口家旧蔵品が所載される。そのうち蔵帳の記述と合致する作品を紹介する。ここでは二件の売立目録に注目する。

一件目は大正四年(一九一五)六月二十四日、東京美術倶楽部において開催された竹内専之助の売立である。『絵画清談』によれば、この売立では多数の溝口家旧蔵品が出品されたことがわかる。荷主である竹内の号は寒翠園で、⁽¹¹⁾和敬会のメンバーであった。

二件目は昭和九年(一九三四)十一月十九日、超願寺(新潟市)において開催された安倍家の売立である。同家の売立では多数の溝口家伝来品が所載されている。このほか溝口家伝来品ではないものの『溝口公地獄極楽画中公讃(双幅)』(遠州茶道家蔵)が所載される。⁽¹²⁾これらの溝口家伝来品や藩主による作品は、新発田において根強い人気があったものと推測される。なお、安倍家の売立では以上のほか、溝口家伝来と

する作品のうち図版の掲載はな
いものの古薩摩筒茶碗、高取茶
碗、花三嶋茶碗がある。しかしな
がら『新発田御道具帳』と合致す
る作品については特定不能であ
る。

以上、二件の売立に出品され
た作品は売立目録『某家蔵品入
札』および『新潟県新発田町安倍
家蔵品入札目録』において確認す
ることができる。これらの目録に
は溝口家旧蔵品とする数点が出
品されている。蔵帳の記述と合致
する作品は以下がある。

A 『某家蔵品入札』

⑤ 仁清竹絵茶碗 (図13)

銹絵によって竹が描かれる。蔵
帳の「御茶碗之部」中、「る式ば
ん 一 仁清竹繪茶碗」と合致す
る。

⑥ 膳所光悦茶碗 (図14)

蔵帳の「御茶碗之部」中、「一



図 13 仁清竹の繪茶碗
(『某家蔵品入札』より転載)

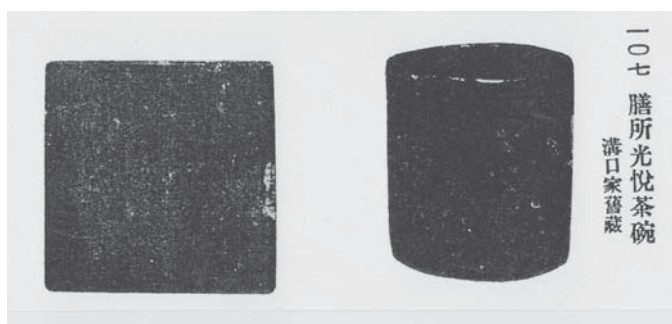


図 14 膳所茶碗
(『某家蔵品入札』より転載)

膳所焼茶碗」と合致すると考え
られる。

⑦ 時代菊蒔絵棗 (図15)

蔵帳の「御棗之部」中、「一
六十三ばん 一 時代菊蒔繪棗」
と合致する。

⑧ 青貝薬器 (図16)

蔵帳の「御棗之部」中、「一
青貝中次」と合致する。

⑨ 唐物七宝入水次 (図17)

蔵帳の「御水次之部」中、「一
唐物水次」に合致する。

B 『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』

⑩ 黄瀬戸筒茶碗 (図18)

蔵帳の「御茶碗之部」中、「黄
瀬戸茶碗」と合致する。

⑪ 井戸茶碗 (図19)

蔵帳の「御茶碗之部」中、井戸



図 15 時代菊蒔絵棗
(『某家蔵品入札』より転載)



図 16 青貝薬器
(『某家蔵品入札』より転載)



図 17 唐物七宝入水次
(『某家蔵品入札』より転載)

茶碗とある中のいずれかと合致すると考えられる。

⑫青井戸茶碗 銘翠浪 (図20)

蔵帳の「御茶碗之部」中、井戸茶碗とある中のいずれかと合致すると考えられる。なお、この茶碗は現在、個人が所蔵しており、先の『文化情報学』第九巻第二号で紹介した。収納する箱には「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。拝見したところ釉薬の調子は枇杷色を呈することから、青井戸ではなく井戸である。

⑬高取茶入 (図21)

高取焼の茶入である。なだれの部分をみることもできる。蔵帳の「御茶入之部」中、「古高取茶入」と合致する。

⑭余三作黒棗 (図22)

千利休と同時代に活躍した塗師余三による棗である。仕服は



図18 黄瀬戸筒茶碗
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)



図19 井戸茶碗
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)



図20 青井戸茶碗銘翠浪
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)

間道、緞子、もう一つは毛織であろうか、以上三点が付属する。
蔵帳の「御棗之部」中、「余参棗 箱書康任君」と合致する。箱書をした康任とは石見浜田藩第三代藩主松平周防守康任(二七九九―一八四二)のことである。



図21 高取茶入
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)



図22 余三作黒棗
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)

⑮安南茶入 (図23)

ベトナム地域で焼成された安南焼の茶入である。元来は薬器であったのだろうか後世に茶入として見立てられたものであるう。

蔵帳の「御茶入之部」中、「安南茶入」と合致する。箱書をした人物は川上不白と紹介される。なおこの茶入は現在、木村茶道美術館が所蔵する。



図23 安南茶入
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)

⑯古九谷金欄手茶入 (図24)

九谷焼による茶入である。図版からなだれになった箇所を確認でき、九谷焼の作例の一つとみることができる。



図24 古九谷金欄手茶入
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)

蔵帳の「御茶入之部」中、「九谷茶入」と合致する。

⑰古伊賀水指 (図25)

伊賀で焼成された水指である。本作は轆轤引きの段階で横に糸目が施され、上部に輪が付けられる。上部には灰を被ったために白い部分がみられ、下部には素地がみられる。



図25 古伊賀水指
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)

蔵帳の「御水指之部」中、「御秘蔵二十八ばん 古伊賀水指」と合致すると考えられる。

⑱伊賀共蓋水指 (図26)

伊賀焼の共蓋水指である。蔵帳の「御水指之部」中、「伊賀細口水指」と合致すると考えられる。



図26 伊賀共蓋水指
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)

⑲木地釣瓶水指 (図27)

蔵帳の「御水指之部」中、「木地釣瓶塗蓋水指」と合致すると考えられる。目録の図版から塗蓋が確認できる。また目録の記述によればこの釣瓶は桃山城で使用されていたものであるとされる。



図27 木地釣瓶水指
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)

⑳瓢釜 (図28)

蔵帳の「御釜之部」中、「御物瓢単釜」と合致すると考えられる。



図28 瓢釜
(『新潟県新発田町安倍家蔵品入札目録』より転載)

三 蔵帳に所載されない道具

溝口家の蔵帳には香合や花入などの記載はない。別に蔵帳があったと考えられるが、現時点では確認できていない。

『文化情報学』第九巻第二号でも述べたが、小堀蓬雪作共筒茶杓銘《若草》(個人蔵)は溝口家旧蔵品であるものの、蔵帳に所載されていなかった。この点から、蔵帳に所載されない道具も多数あったものと考えられる。

筆者のこれまでの調査から、蔵帳には所載されない溝口家旧蔵品を確認した。ここでは現存する作品および文献記述から紹介する。

(1) 現存する作品

① 扇面蒔絵香合 (根津美術館蔵、図29)

現在、根津美術館では《扇面蒔絵香合》を所蔵する。この香合については同館学芸員多比羅菜美子氏の立ち会いのもと拝見することができた。

粉溜の丸形香合である。口には錫縁が施される。表面には青貝で八ツ橋と杜若、扇面を描き、扇面には二匹の蝶、雲間の月、秋草を描く。蓋裏には梨地に金蒔絵が施され、扇面に向かい合う二匹の蝶と千鳥が描かれる。身の部分も蓋同様に梨地が施され、金蒔絵で開いた扇に薄が描かれる。



図29 扇面蒔絵香合
(根津美術館蔵、画像提供は同館)

それらを収納する箱が付属するも、箱等から溝口家の旧蔵品を示す手かりは確認できない。

この香合はかつて高橋箒庵が溝口家から個人取引によって入手し所蔵した。

『近世道具移動史』によれば、明治三十年前後に、箒庵は溝口家と直接取引によって道具を五十数点購入している。⁽¹³⁾ その作品では伯庵茶碗、保元時代扇面杜若模様香合、啓書記筆李白観瀑などがあった。

その中の一つに保元時代扇面杜若模様香合がある。この香合はその後、箒庵の売立に出品されている。その売立が『東都寸松庵主所蔵品』⁽¹⁴⁾である。この売立は明治四十五年(一九一二)五月二十七日、京都美術倶楽部で開催された。同日録には「保元時代扇八ツ橋青貝入香合 溝口家旧蔵」(図30)と紹介されている。⁽¹⁵⁾ なお、同売立における購入者は根津嘉一郎(一八六〇ー一九四〇)である。⁽¹⁶⁾

以上のことから溝口家より売却されて以降の所有者は、高橋箒庵、根津嘉一郎であり、現在は根津美術館で保管される経緯をみることができる。

② 交趾桜鯉香合 (個人蔵、図31)

交趾による桜鯉の香合である。蓋には魚と花紋があり、これらを鯉と桜に見立てて、この名称がある。また鯉と桜の縁には播茶がある。身の



図30 保元時代扇八ツ橋青貝入香合
(『東都寸松庵主所蔵品』より転載)

部分は緑釉である。身蓋裏はともに薄い乳白色な釉薬が掛けられている。総体に発色はよく、交趾の中でも硬い焼成の部類に属する作例である。

収納する箱蓋裏(図32)に「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。



図 31 交趾桜鯉香合
(個人蔵、撮影筆者)

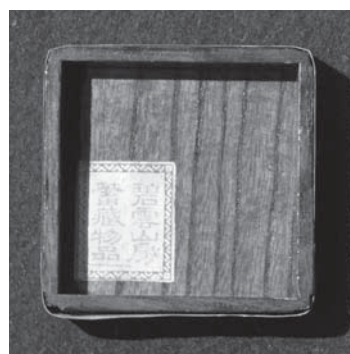


図 32 箱蓋裏

③呉須六角台牛香合(個人蔵、図33)

呉須による香合である。台の上の動物は眠った牛である。素地に呉須で文様が描かれ、特有の発色をしている。箱甲部(図34)には「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印がある。この蔵印は他と比較すると二列の市松となつ



図 33 呉須六角台牛香合
(個人蔵、撮影筆者)

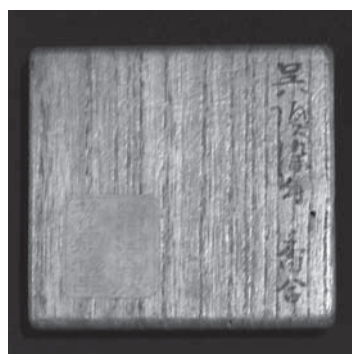


図 34 箱甲

た縁がなく、初期の蔵印であると推測される。

④呉須水鳥宝珠香合(個人蔵、図35)

呉須の香合である。蓋部分には木瓜の中に花鳥が描かれている。総体に立ち上がりのみせる宝珠形である。上部は五カ所に水鳥が描かれ、下部には草花が描かれる。収納する箱甲部(図36)には遠州系の筆跡で「呉須 香合 宝珠」とあり、側面には「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印、「秘」の蔵印がある⁽¹⁷⁾。



図 35 呉須水鳥香合
(個人蔵、『和美的会』より転載)

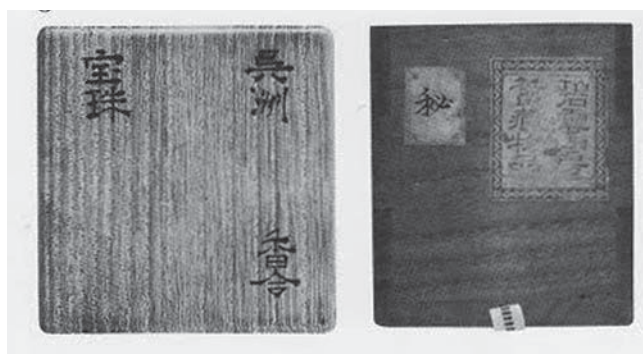


図 36 箱甲部(左)および側面(右)

⑤胡銅四方花入(個人蔵、図37)

胡銅による四方の花入である。口元から底にかけておおらかな曲線を描く。表面には赤みを帯び、素地がみられる。

箱甲部(図38)には小堀宗中により「銅四方 花入」の墨書があり、

箱側面には溝口家の収蔵を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印が貼られる。箱は遠州系の造りになっている。



図 37 胡銅四方花入
（個人蔵『茶美の会』より転載）

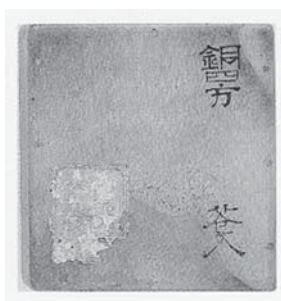


図 38 箱甲部

⑥ 桑柄桜皮巻灰匙（個人蔵、図 39）

柄は桑であるが細身であり、桜皮が巻かれている。また匙の部分には



図 39 桑柄桜皮巻灰匙
（個人蔵『茶美の会』より転載）

緑青がでており、景色となっている。
箱の甲裏（図 40）ともに白酔庵、芳村観阿（一七六五—一八四八）による墨書がある。甲部には溝口家の蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」および「秘」の蔵印が貼られている。



図 40 箱甲（右）および裏（左）

⑦ 松竹梅金象眼大角豆鐲（個人蔵、図 41）

現在、個人が所蔵する松竹梅金象眼大角豆鐲がある。形状は大角豆で、内側には松竹梅の金象眼が施される。

鐲と緒に収納される副書（図 42）は溝口直諒による墨書である。同書の「松竹梅象眼 御大角豆鐲 一」は古筆了伴の自筆で、それ以外が直諒の筆跡である。同書には以下のような記述がある。



図 41 松竹梅金象眼大角豆鐲
（個人蔵、撮影筆者）

文政十三庚寅十月廿八日古筆了伴初て

茶会に呼候節上ケもの包上書了伴自筆也

箱書付同日所望いたし認候事

記述によれば、文政十三年（一八三〇）の茶会にはじめて了伴を招いたとき、記念としてこの鑲を直諒に献上したことがわかる。

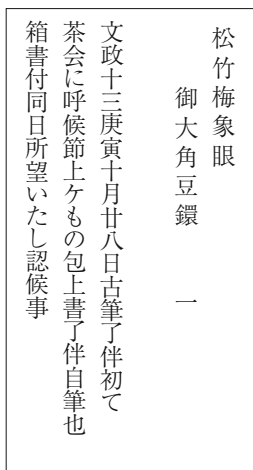
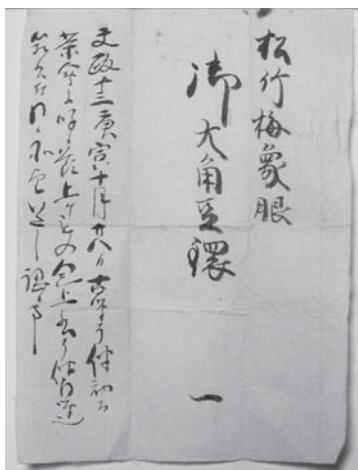


図 42 付属する溝口直諒副書

⑧南蛮砂張香箸（個人蔵、図 43）

南蛮砂張香箸である。収納する箱の甲部（図 44）には芳村観阿により

南ばんさはり香箸

と書かれ、裏に署名がある。

箱には溝口家の旧蔵品を示す蔵印がある。

（2）文献にみる作品

⑨古銅桃底花入（図 45）

昭和七年（一九三二）十

月三十一日、東京美術倶楽

部において内田家と平戸藩

主松浦家、高橋箒庵家の合

同売立が開催された。その

売立目録が『内田家某家所

蔵品入札』である。⁽¹⁸⁾ 同書に

は「古銅桃底花入 紹鷗所

持 朱四方盆添」および収

納する箱甲部の画像が所載

される。

甲部には溝口家の所蔵品

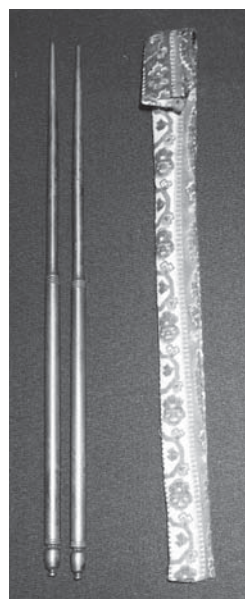


図 43 南蛮砂張香箸（個人蔵、撮影筆者）



図 44 香箸を収納する箱



図 45 古銅桃底花入（右）と箱甲部（左）（『内田家某家所蔵品入札』より転載）

であることを示す「碧雲山房蓄藏物品」の蔵印があることから同家伝来品であると考えられる。

また、この花入は『茶道全集（十四卷）』には香取秀真による「茶器中の金物類」に花入本体のみが「紹鷗桃底花入 伯爵 溝口直正蔵」⁽¹⁹⁾として紹介されている。

⑩青貝四方盆（図46）

『遠州会展観図録』に「青

貝四方盆 宗甫箱書付 伯爵

溝口直正君蔵」とある。

梅花と菊花、それに七宝を

青貝で蒔絵してある四方盆で

ある。盆の表面には「双清」

とあり梅と菊共に清しの意で

あろう。また、「弘治二年冬月造」とある。



図46 青貝四方盆
（『遠州会展観図録』より転載）

（3）文献にみられる溝口家旧蔵品

⑪小堀遠州作一重切花入 銘《あまの》

溝口家の所蔵した花入中、著名な作品では小堀遠州作銘《あまの》がある。この花入は明治三十七年（一九〇四）の京都古美術展覧会において抹茶席第二席（第二陳列三畳茶室）で使用されている。⁽²⁰⁾その後、この花入は江戸の質屋であった吉田丹左衛門（号は楓軒）が所蔵し、同人の茶会において使用が確認できる。

『東都茶会記』中の吉田楓軒の茶会で使用された遠州作竹花入銘《あ

まの》について、拝見した高橋箒庵は次のように述べている。⁽²¹⁾

扱て後座の床如何と見れば、一見遠州作と領かる、節下に堅割一本ある一重切大竹筒に、観菊と蠟梅^(巻)を活けられたが、花と花入と相応して何とも言はれぬ風情であった。此花入は溝口伯爵家伝来で銘をあまのと云ふ者であるが、多分河内国天野より出た竹なので、遠州が斯く命名したのであろう。大竹で肉厚で、少しく青味を帯びて居て、節下一本が利休作園城寺竹花入と同然実に此花入の生命である。

記述から、銘《あまの》の花入は、肉厚で利休作竹花入《園城寺》（東京国立博物館蔵）のように筒正面に雪割れがある花入であることがわかる。当日の花は霜受け葉が紅葉した寒菊と名残の蠟梅が生けられた。拝見した箒庵は河内国（現在の大阪府東部あたり）の天野で採れた竹をもって、遠州が命名したとしている。

⑫一尾伊織作茶杓 銘《山姥》

高橋義雄『萬象録（第三巻）』、大正四年（一九一五）一月三十一日条「一尾伊織作茶杓銘山姥」には次のような記述がある。⁽²²⁾

池田慶次郎一尾伊織の茶杓銘山姥を持参す。溝口伯爵家の所蔵品の由、筒に山姥とありて茶杓に夕月の二字を彫りたり、是れは筒と茶杓と代わりたるにあらずやとの懸念にて三十五円なりといふ。されど作者の考にては謡曲山姥の中に、「夕月早きかげろうふの」と云ふ文句あるに因り、茶杓に夕月の二字を彫りたるなるべし、茶杓に雲の如き模様ありて山姥の舞扇に用ふる月の雲の模様と似寄りたるころあり、山姥の銘は蓋し是より起りたるならん、此茶杓は確に掘り出し物なりと思はる。

茶杓は一尾伊織による作で共筒であった。茶杓には夕月と彫られており、銘である山姥とは謡曲山姥にある「夕月早きかげろうふの」の歌意に因むものであるとされる。

⑬その他

『萬象録』、大正四年（一九一五）二月七日条には以下のような記述がある。⁽²³⁾

池田慶次郎、溝口伯爵家の切れ類、印籠、煙草等入、二、三十点を持参せり

溝口家旧蔵の布、印籠、煙草道具など約三十点が売却されていた模様である。以上の溝口家旧蔵品を持ち込んだ池田とは東京の美術商である池田慶次郎のことである。

なお、溝口家は明治三十七年（一九〇四年）に売立を行っており、当時の状況については『文人』において紹介した。⁽²⁴⁾

四 おわりに

本稿では、溝口家の蔵帳に所載される作品、蔵帳に所載されないものの溝口家旧蔵品である作品を紹介した。

現存する作品のうち蔵帳と合致したものでは織部沓茶碗（個人蔵）、伊羅保茶碗銘《団扇》（個人蔵）、清巖宗渭作茶碗（野村美術館蔵）、瀬戸茶入銘《大概》（個人蔵）があった。

織部沓茶碗は『大正名器鑑』に所載されるも、その後の消息は不明であったが今回の調査によって所在が判明した。この茶碗は織部から藩祖、

秀勝に贈られた茶碗である。

伊羅保茶碗銘《団扇》（個人蔵）は、文久二年（一八一六）三月五日の茶会で用いられた。このちに書かれた小堀宗中筆溝口直諒追憶和歌三首《雪月花》（個人蔵）の記述から、十一代藩主直溥による花を趣向とした茶会で所用されていた。宗中は溝口直諒との交流は知られていたが、次代の同藩藩主である直溥とも交流していることが判明した。

清巖宗渭作茶碗（野村美術館蔵）は「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印があることから溝口家旧蔵品である。

瀬戸茶入銘《大概》（個人蔵）は、遠州が所持してのち、溝口家に伝来した茶入であり、生海鼠手すなわち大概手の本歌である。

このほか、売立目録などの文献から、合致する作品を紹介した。蔵帳に所載されないものの同家旧蔵品とする茶道具などでは香合や花入をはじめとする道具があった。

同家旧蔵品とする香合では扇面蒔絵香合（根津美術館蔵）、桜鯉香合（個人蔵）、呉須六角台牛香合（個人蔵）、呉須水鳥香合（個人蔵）などの質の高い作品を所蔵していたことが確認できた。このほか松竹梅金象眼大角豆鐙（個人蔵）は、直諒が文政十三年（一八三〇）の茶会にはじめて古筆了伴を招いたとき、了伴が記念としてこの鐙を直諒に献上したものであった。

溝口家の茶道具のコレクションは藩祖秀勝にはじまる茶の湯の交流と十代藩主直諒による交流の中で収集されていることが確認できた。

今後の課題として、新潟において開催された売立目録の調査を行い、溝口家の旧蔵品を明らかにしていきたい。

謝 辞

本稿の執筆にあたり調査にご協力をいただきました遠州茶道宗家家元小堀宗実氏、遠州流茶道家元主鑑浅井宗兆氏、個人のご所蔵家の皆様、木村茶道美術館館長石黒信行氏、野村美術館主任学芸員桐山秀穂氏、根津美術館主任学芸員多比羅菜美子氏、文献調査にご協力いただきました東京美術倶楽部、新発田市立図書館、東京文化財研究所、同志社大学ラーネッド記念図書館に深謝申し上げます。

註

- (1) 新発田古文書解説研修会編、新発田市立図書館編『溝口伊織家古文書(目録第一集)』新発田古文書解説研修会、二〇〇四年。
- (2) 宮武慶之「新発田御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具」『文化情報学』第九卷第二号、文化情報学会、二〇一四年、五九―一二二頁。
- (3) 前掲註(2)。
- (4) 市野千鶴子『古田織部茶書』第二卷、思文閣出版、一九八四年。
- (5) 小堀宗慶『遠州流茶道宝典』東京堂出版、一九八三年、八六―九二頁。
- (6) 野村文華財団編『野村美術館名品図録』野村文華財団、一九八四年、四五頁。
- (7) 宮武慶之「明治期における溝口家の道具移動史」『文人』学習院大学人文科学研究所、二〇一五年、二二三―二五二頁。
- (8) 井口海仙、末宗広、永島福太郎『原色茶道大辞典』淡交社、一九七五年、六九一頁。

- (9) 世田谷区立郷土資料館編「当流聞書口伝」『続石井至毅著作集』所収、世田谷区教育委員会、一九九二年、二〇三頁。

- (10) これらの譲渡の背景については宮武慶之「閑極法雲・東澗道洵両筆墨蹟について」『アトリサーチ』第十四号(アトリサーチセンター、二〇一四年、八九―一〇四頁)を参照されたい。

- (11) 『絵画清談』第六卷七月号、絵画清談社、一九一八年、五九頁。なお本文中には入開札が七月二十四日とあるが、六月二十四日の誤記載である。

- (12) 実見したところ溝口直諒と小堀宗中による合作で直諒によって閻魔と地藏が描かれ、宗中によって「じごく」、「ごく楽」などと書かれている。

- (13) 箒庵による『近世道具移動史』の「溝口伯家藏品」には以下のような記述がある。

明治三十年前後より個人取引で他に譲られた点数も少からず、三十五年頃余も亦同家の道具五十余点を一手に譲り受けた事あり、其中には伯庵茶碗、保元時代扇面杜若模様香合、啓書記筆李白観瀑等の名品を含蓄して居た

記述から、新発田藩十代藩主直諒が収集した道具などは溝口家に存在したが、これらの道具は明治三十年(一八九七)前後から個人取引により売却された。特に明治三十五年(一九〇二)には筆者の高橋箒庵自身も書画および茶器等五十数点を購入したようである。

- (14) 売立目録『東都寸松庵主所蔵品』一九一二年、東京文化財研究所蔵、請求記号美研-Q162。

- (15) 根津美術館藏品と比較してみると、ハツ橋部分には当初螺鈿時絵が施されていたと考えられるが、売立時点で剥落していることが確認できる。

- (16) 高橋箒庵『昭和茶道記(二)』淡交社、二〇〇二年、三〇三頁。

「青山斑鳩庵初風炉」において香合は「保元時代錫縁八ツ橋 唐物若狹盆に載せて」が用いられ、箒庵によれば以下のような記述がある。

保元時代錫縁八ツ橋は溝口家伝来で八橋は錫、杜若は青貝の蓋裏に、扇面模様あり、図様のいかにもしをらしく然も時節真向きなるは言ふも更なり。保存も極めて完全にして、同時代の香合としては、益田鈍翁所持鈴虫香合など、相並んで時代蒔絵香合中五指の一に数へらるゝものなるべし。然るに此席には釣棚がないので所謂盆香合となし、之を唐物若狹盆に載せて使はれたのは、いかにも尤と思われた。

(17) 「秘」の蔵印については溝口直諒の蔵品中にみられ、直諒による入手品中、主要な作品に貼られていたと考えられる。

(18) 売立目録『内田家某家所蔵品入札』一九三二年、東京文化財研究所蔵、請求記号美研1585。

(19) 香取秀眞「茶器中の金物類」『茶道全集(十四)』創元社、一九三六年、一九三～二四四頁。

(20) 前掲註(7)。

(21) 高橋箒庵『東都茶会記(四)』六四九頁。この茶会の席主である吉田楓軒は大正六年(一九一七)三月十九日の茶会(『東都茶会記(四卷)』、六十頁)においても、この花入を用いている。

(22) 高橋義雄『萬象録(第三卷)』思文閣出版社、一九八七年、三〇～三一頁。

(23) 前掲註(22)。四〇頁。

(24) 前掲註(7)。